縁組による讃岐山麓村の人口移動*

——縁組による人口移動の地域的研究 第4報——

合 田 榮 作**

序・本篇は讃岐山脈北麓阿讃國境の20ヵ村へ、1949年に届出た婚姻届1777と離婚届155、合計1932人の縁組による移動者を資料として、特にその行先地と前住地からみた通婚圏等を考察して山麓村としての特色を述べたもので、筆者の試みつつある縁組による人口移動の考察の1部である。1949年のを用いたのは平野村や島嶼村や都市等と年次を同じくする爲である。資料蒐集に際し種々御高配をいただいた高松・丸龜・観音寺等の法務局に對して深甚の謝意を表する次第である。

1. 村の概要 調査地域は第1圖のようで、地壘をなす讃岐山脈の北麓の斷層線附近から阿讃國境に亘る山地村で、標高は中央部の龍王山1750mを最高として東西に行くに従つて低くなるが、壯年期的地形は村内を著し

第1圖 山麓20ヵ村分布圖

く複雑にしている。谷形はほぼ北に開くが斷層線の爲東西のものも多く、大川部多和村のように徳島縣の吉野川流域に屬して南に開くものもある。香川縣では気温は最低であり降水量は最多で、田植も稻刈も一番早く且長期間を要し、特に中央部はその傾向が著しい。中央部の諸村には伐木・製材・薪炭製造がやゝ多いが一般的には農業村で、谷間で米麦二毛作・米一毛作が行なわれ山腹では麥類・甘藷・煙

* 1951年11月 日本地理學會大會にて發表

** 香川大學學藝學部 地理學教室

地理學評論 25卷10號(1952年10月)

草等の階段耕作が多く、蜜柑や梨等の果樹（五郷村・和田村・財田村）や筍（財田村・十郷村）やそば（美合村・上西村・鹽江村）等もやみられる。農村副業としての農産加工以外の工業は少なく、交通はほとんど南北のものでバスが多く、東西の連絡は至つて不便である。従つて北方諸都市の商圏に分割され、人口移動もかゝる傾向をもつ。終戦直後の好況期も終つて今や離村向都現象が著しく人口対策に大重である。元來水の少ない本縣の水の供給地をなすが、近年各地にダムが建設せられるようになって特に注意せられるようになった。中央部の鹽江村は泉都としてやゝ観光地的である。

2. 移動者の構成 離村者・入村者・自村者（自村内移動者）に三別し、村別・男女別に集計すると次の事實がわかつた。即ち離村者が最も多くをしめ、入村者は之に類似し、自村者は18%にしかすぎなく、離村者と自村者が著しく多い島嶼村⁽¹⁾とは異なつてゐる。離婚者は8%であるが、その總數中で占める%は自村者に最も多く、入村者・離村者が之に次ぎ、離村者中に離婚者の多い島嶼村とは又異なつてゐる。性別では女子が89%で大部分をしめ、離村・入村・自村別では女子が90, 89, 87%となり、女子では離村者が、男子では絶對數では入村者が、總數中の%では自村者が多く、島嶼村と類似する。移動者の人口千人當人數は27.1で島嶼村よりも多い。

3. 移動の地域的考察—通婚圏 (a) 自村内移動 人口千人當村内移動數は4.8で、その村別分布は第2圖となり、中央部の村や面積の廣い村には多い傾向が明瞭であり、移動總數中自村内移動數の占める3%の分布からも同じことが言える。かゝる結果は交通の不便さ、移動範圍の廣大さから當然であらう。

第2圖 自村内移動率 $\left(\frac{\text{自村内總數}}{\text{人口}} \right) \times 1000$

(b) 縣内移動 離村者、入村者を村別に、縣内外別、性別に整理すると次の事實がわかつた。即ち離村者中では縣内へが797人中572人で71.8

%となり、縣外に多い島嶼村とは非常に異り、性別からは男子はその88%、女子はその70%が縣内となり、男子は絶対数は少いが%では女子よりも多い。入村者中では縣内からが796人中552人で69.4%となり、やはり主たるものとなつて島嶼村とは異なり、男子はその78%、女子は68%が縣内でやはり男子の%が大である。離村者と入村者とを比較すれば共に縣内が主要地域をなすこと、男子が女子よりは%が大であることが共通しており、縣内縣外別、性別ではほぼ現象が類似している。然し縣内へは出るものが多く、縣外からは來るものが多いこと、縣内から來る者には離婚による歸村者が割合多いことは注意すべきことである。縣外から來る者が多いことは、縣外へ勞力移動等で出ている者と結婚して本籍を之等山地村に入れる者が多いことを物語るものであらう。

縣内出婚圈を示す縣内への離村者の行先地を市町村別に見れば、一圖に分布するが三豐郡南部・琴平町附近・丸龜市附近・高松市・長尾町附近・引田町附近、即ち近距離と都市に多く、遠くや島嶼部に少い。更に行先地市町村人口千人當人數を求めて等値線を描くと、山麓20ヶ村に近接する程多いが、距離約2~3kmからはL字型に急減して遠距離程少く都市も少なく距離の制約が明瞭である。縣内入婚圈を示す縣内からの入村者の前住地を市町村別に見れば離村者の行先地に類似し、やはり一圖に分布するが、三豐郡南部・琴平町附近・丸龜市附近・高松市・長尾町附近・引田町附近即ち近距離と都市に殊に多く、遠くや島嶼部には少い。そして前住地人口千人當人數を求めて等値線を描くと之又離村者の行先地に類似して近距離に多く、距離約2~3kmからL字型に急減して遠距離ほど少く都市も多くならない。然し出婚圈と比較すれば、多度津町西部・坂出市南方の讃岐平野の中央部・香川郡下笠居村附近等が前住地とならず、従つて地域的には幾分狭い所に差異がある。かくて移動絶対數からも、地域的廣さからも、人口移動の方向は南から北へがその逆流よりは強いと言ひ得る。

次に縣内出婚圈と縣内入婚圈とによつて成立する縣内通婚圈を決定する爲に、離村者の行先地町村別人數と入村者の前住地別人數とを合計してその市町村の移動數となし、その市町村人口千人當人數の分布を等値線で描くと第3圖となり、移動數は近距離程多く、所によつて少々は異なるが大體距離5kmからは1人以下となりここからはL字型に急減して遠距離程少い。即ちここに縣内通婚圈の特色を發見するのである。

(c) 縣外移動 縣外出婚圈を知る爲縣外離村者225人を中國への4人を除き行先地都道府縣別にみれば、大阪・兵庫・岡山・徳島・愛媛・廣島・福岡等即ち隣接縣や阪神地方に多く、西では南九州、北では山陰、東では

第2圖 離村者入村者總數の人口 1,000 人當人數分布

多いのは徳島縣の 38.7 人，岡山縣の 21.7 人，愛媛縣の 10.5 人等で，大阪府・兵庫縣・廣島縣等が之につき，隣接瀬戸内地域を核心として京都府・福井縣・福岡縣までの地域が主要地域をなす。殊に徳島縣に多いことは注意すべきことである。

縣外入婚圏を知る爲縣外入村者 242 人の内中國からの 1 人を除き，その前住地を都道府縣別に見れば，徳島縣の 66 人，大阪府の 32 人，兵庫縣の 23 人，岡山縣の 19 人，愛媛縣の 18 人，福岡縣の 17 人等が多く，やはり隣接縣や都市の多い阪神地方等に多く，少い所は西では南九州，北では山陰，東では滋賀縣以東で，離村者の行先地と類似する。人口百萬人當人數の分布も，徳島縣の 75.2 人を最多として愛媛縣の 11.8 人，岡山縣の 11.4 人，高知縣の 10.4 人等が多く，大阪府・兵庫縣・福岡縣・山口縣等之に次ぎ，四國と瀬戸内東部地域を核心として東は福井縣から西は長崎縣までが主要地域となり，離村者の場合と類似する。然し徳島縣からは非常に多く且離村者の約倍もあること，岡山縣からは多いが離村者の約半分であること，高知縣から多いこと等は注意すべきことで，之等から縣内の場合と同じく，人口移動は南から北への流がその逆流よりは非常に強いことを知るのである。

縣外通婚圏を知る爲縣外離村者と縣外入村者の合計數のその地の人口百萬人當人數を計算して分布を見れば第4圖となり，徳島縣の 114 人を第一として，岡山縣の 33.1 人，愛媛縣の 22.4 人，大阪府の 17.4 人，高知縣の 13.8 人，兵庫縣の 13.0 人等が多く，廣島縣・福岡縣・京都府・福井縣・

滋賀縣以東に
少く，都市の
多い愛知縣・
東京都・新開
地北海道はや
や例外をなし
て多い。之を
その地の人口
百萬人當人數
に計算して，
(人口は 1950
年 10 月 1 日
のもの (その
分布をみれば，

第4圖 離村者・入村者總數の人口100萬當人數分布
距離の制約は方向により異なる。

長崎縣等が之につぎ、縣外通婚圏は東は福井縣から西へ山陽、四國地方を包含して北九州縣に及ぶ地域が主をなし、殊に隣接縣が核心地域をなす。即ち距離的近接地域に決定せられるが、

(d) 相互關係 かくて自村内、縣内、縣外に於ける通婚圏は明瞭となつたが、之等の相互關係はどうであらうか。先づ移動數から見れば縣内が最も多く、縣外自村内の順に少なくなるが、之よりも人口比率によるものがより正しいから之を用いると、自村内移動は71,119人(昭和24年8月1日常住人口20ヶ村合計數)に付339人で千人當4.8人となり、縣内移動は878,714人(1949年8月1日縣常住人口949,913人から20ヶ村の常住人口71,199人をのぞいたもの)に付853人で(20ヶ村の移動合計1124人から20ヶ村間相互の移動數離村138人、入村133人合計271人を除いた離村434人、入村419人の合計數)一萬人當9.6人となり、縣外移動は82,253,615人(1950年10月1日全國人口83,199,637人から香川縣人口946,022人をのぞいたもの)に付462人で(467人から中國との5人をのぞいたもの)百萬人當5.6人となる。即ち自村内が一番主要なものとなり、縣内が之に次ぎ、縣外に最も少く、やはり近い自村内が主要通婚圏をなすと言えよう。

4. 移動者の年齢 之は非常に變北があり、最年少者は大川郡相生村への入村女子の1933年生れの16歳であり、最年長者は綾歌郡造田村への入村男子の1872年生れの77歳で、最も多いのは1925年生れの33歳である。今その年齢構成を圖示すれば第5圖となる。即ち1925年生れの23歳を最多として22歳、21歳、24歳が之に次ぐが、若年者へは急減するのに對して、年長者の方へは1921年生れの28歳頃までは急減するもそれ

第5圖 移動者の出生別變化 (1949)

以後は減少が一進一退をしつつ緩慢であり、明治 39 年生れの 43 歳(昭和 24 年)からは非常に少く断続している。又性別では女子のみの場合は以上と類似するが、男子のみではその数も少いが 1922 年と

'23 年生れ即ち 27 歳と 26 歳とが最も多くて女子よりは 3~4 歳長じているが、若年者への變化も年長者への變化も少く年令別變化が少い。又離村者と入村者は 1925 年生れを最多として類似の變化をなすが、自村者は一年若い 1926 年生れが最も多い。村別特色を變化の多い女子を例として見れば、絶対数が少く且村別變化が多い爲その特色の把握は困難であるが、和田村のように 20~24 歳頃が臺地型に多いもの、十郷村や五名村のように一つの明瞭な圓錐型をなすもの、五郷村や河内村や多和村のように丘陵型をなすもの、財田村や造田村や田中村のように二つ以上のピークをもつもの、其等の中間型のもの等があること。和田→五郷→紀伊→栗井・財田→十郷→七箇・長炭→造田→美合・田中→神山→多和・相生→福榮→五名の如く同一河川の下流から上流への一續きの地域に於ては、ピークは下流に早く上流におそい傾向があること等が分る。之等のことを説明することはなかなか困難であるが、年次變化は一要因をなすであらう。

・ 5. 移動の時期 時期を年と月に分けて、先づ年による變化をみる。資料が不十分だつた栗井村・財田村を除いた 18 ヶ村 1,682 人(内離婚 132 人)を圖化すれば第 6 圖となり、新らしい 1949 年から最も古い河内村の女子で村内移動をした明治 43 年まで過去 39 ヶ年間という長年間であることに先づ驚くが、最も多いのは届出の前年たる 1948 年の 724 人(内離婚 25)の 43.1%で、'49 年の 570 人(80)の 31.3%が之に次ぎ、'48 年以前は'47 年の 192 人(9)の 11.4%、'46 年の 76 人(8)の 4.5%、'45 年の 30 人(4)の 1.8%と急減し、最近 3 ヶ年で 88.5%をしめ、届出の 5 ヶ年前たる 1944 年から以前は非常に少く、1945~44 年を界として L 字型に分布している。性別では特色がないが、離婚のみでは'49 年が最も多く 80 人で 60.6%をしめ、'48 年の 25 人 18.9%が之につぎ、2 ヶ年で大部分をしめ、且 1945 年まででほとんどを占め、新らしいものが多い。之は届出が早いこ

とを物語るものであろう。

村別では河内・造田・相生等各村は 24 年が最も多いこと、美合村は 23 年が殊に多いこと、神山・多和・五名・福榮・相生の各村は古いものがないこと、特に五名村は僅か 38 人であるが最も古いものでも 1945 年であること等に特色がある。

各年の移動を月別に集計してその配布をみれば第 7 圖となり、三

つのピークと三つの谷となり、1 月の 236 人 (8) の 14% が最も多く、2 月の 231 人 (10) の 13.8% が之につぎ、4 月の 216 人 (12) の 12.9%、5 月の 183 人 (17) の 11%、10 月の 176 人 (12) の 10.5% 等も多く、1、4、10 月がピークをなす。最も少いのは 7 月の 60 人 (13) の 3.6% で、8 月の 61 人 (10) の 3.6%、6 月の 63 人 (7) の 3.7%、11 月の 69 人 (10) の 4.1%、9 月の 70 人 (17) の 4.2% 等之に次ぎ、6 月から 9 月までの夏と 11 月と 3 月が谷をなす。即ち冬季の年末年始を第 1 として、春秋の好季節が之につぎ、暑い夏季に少く島嶼村と同じである。之は冬は農閑期、夏は農

第 7 圖 移動數 (各年合計) の月別變化

子は又之と變らないが、男子は數も少い爲にかこの傾向がうすれている。

第 6 圖 移動者の移動年別變化
(總數 1,682 人, 内婚者 132 人)

繁期であることのほかに、季節と關係が深い縁組による人口移動の特色を示していると考えられる。離村者、入村者、自村者別に考察しても同じ結果であることは 7 圖に示す通りであるが、性別では女

離婚のみによる移動は1月から12に月へ8, 9, 10, 12, 17, 7, 13, 10, 17, 12, 10, 5人と變化し(不明2人, 5月と9月とに最も多く, 12月と1月に少く, 移動總數とは逆に夏に多く冬に少い傾向がある。村別では變化はあるが特別な特色は見出し難い。

結語 以上を要約すれば, 山地で農業村で南北交通が主である讃岐山脈北麓の諸村では, (1) 離村者が入村者よりも多く, 自村者が最も少いが, 離婚者%のみではこの逆の順である。(2) 自村内移動は面積が廣く且交通が不便な中央部の諸村に多い。(3) 縣内移動は數が最も多く, その移動内では離村者が入村者よりも多く, 移動方向は南から北へがその逆流よりも強く, 縣内出婚圏は縣内入婚圏よりも廣く, 縣内通婚圏は距離的制約を受けて距離の増大と共に移動數がL字型に減少して近距離地域に決定せられ, その距離は約5kmである。(4) 縣外移動は離村者よりも入村者が多く, 方向は縣内の場合と同じく南から北へで徳島縣→香川縣→岡山縣へが主流で, 縣外出婚圏と縣外入婚圏とは類似し, 縣外通婚圏は隣接縣を核心とした瀬戸内東部地域である。(5) 縣内・縣外・自村を人口比率から通婚圏として見れば自村・縣内・縣外の順となり, やはり通婚圏は近距離地域となる。(6) 移動年令は巾が廣く, 23歳をピークとして若年者, 年長者共に急減するが, 28歳以上の年長者の減少は緩慢であり, 男子のみではピークが3~4歳おくれ且年令別變化が少い。村別變化は大であるが複雑である。(7) 移動年も巾が廣く且ピークは1年前の1948年であるが, 届出年前5ヶ年間の主であり, 離婚のみでは届出年のが一番多い。性別特色は少いが村別特色は多い。移動月は1, 2, 4, 5, 10月等に多く, 氣候, 農事等を含んだ季節との關係が密接である。性別, 村別等による變化は餘り見られない。

(1952年6月10日受理)

註と参考文献

(1) 拙稿: 繰組による讃岐島嶼村の人口移動 香川大學學藝學部研究報告 1部2號 6頁 1951.

MIGRATION CAUSED BY MARRIAGE IN MOUNTAINOUS VILLAGES, SANUKI PROVINCE (SHIKOKU)

[Eisaku GŌDA]*

In order to grasp the characters of migration in the mountain villages, on the north side of the Sanuki Mountains, the author has investigated 1932 cases of migration due to marriages registered to village offices in 1949.

* Geogr. Inst., Gakugei Faculty, Kagawa University

The character may be classified as follows :

(1) The number of emigrants is larger than that of immigrants, and the migrations within the circles of native villages are the smallest in number. (2) The migrations within native villages are characteristic to the villagers situated in the central part, having large areas lacking in facilities of communication. (3) The migrations take place in most of the cases within Sanuki Province, and in these cases the emigrants out of the villages are greater in number than the immigrants into the villages. And the migrations are chiefly directed to the north from the south. As for the sphere of intermarriage, that of matrimonial emigration is larger than that of matrimonial immigration and both of them are definitely limited to near places because of the restriction of distance. As distance becomes greater, the number of migrants becomes smaller, the graphs of which form the shape of "L." The limit of the distance is about 5 km. (4) In case of migrations taking place between Sanuki and other provinces, immigrants are more numerous than emigrants, the direction pointing chiefly to the north from the south. The circle of intermarriage covers the eastern part of the Seto Inland-Sea with three adjoining provinces as its center. (5) Judging from the comparison of population, the localities of intermarriage are to be arranged in the following order according to their weights ; the first, within native villages; the second, within the province; and the third, between provinces. (6) The range of the ages of the migrants is wide, and the age of 23 years forms the peak in the number of migrations and that of over 28 years is far below. When referred only to men, the peak in number appears in a little higher age, showing little variation according to the difference in ages. The differences among villages are very complicated. (7) The years in which the migrations took place range widely and the number reached the highest peak in 1948, which shows the fact that the frequency and number of migrations increase as it comes up to the present time, while the peak in the number of divorces was recorded in the year of 1949 according to their registrations. The differences in number between sex are almost negligible, but those among villages are great. To mention monthly frequencies and numbers, we can see many migrations in 1, 2, 4, 5, 10 and 12, and few in 3, 6, 7, 8 and 11. It is clear that the migrations have a close connection with seasons. But if we consider the migration only in regard to divorce, we can notice little differences among months, and I have also found that the migration has little differences in number in terms of sex as well as villages.